

国語

法文学部・教育学部

注意事項

- 一、「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
- 二、この冊子は表紙を除き十一ページである。
- 三、「解答始め」の合図があったら、解答を始める前に以下の①～②の作業を行うこと。
 - ① 掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。
 - ② 学部名と受験番号及び氏名を、必ず二枚の解答用紙のそれぞれに記入すること。
- 四、解答は、必ず解答用紙の指定された所に縦書きで記入すること。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

A 人は生きる上で、何かしらに価値を置かなければ生きていけない。生きる意味は、すべての人にとって不可欠である。多くの人にとって、最も根源的な価値とは「生命の維持」だろう。これは人間の本能の部分で、意識するかしないかにかかわらず、誰もが行っていることだ。この「生命の維持」には、食べ物を食べ、水を飲み、防寒のために着る物を得ることが必要だ。

生命を維持できた次の段階は、社会の中で生きる人としての在り方がより大きく分かれることになる。ここに、人間性が大きく表れることになる。生命の維持が比較的容易である現代においては、直接は生命の維持に必要な、嗜好品しごうひんや贅沢品ぜいたくひんにも価値を置く人が多くいる（この点については前近代においても同様の構造はある）。また手段であるはずの貨幣そのものに、より価値を置く人もいる。

その一方で、貨幣や嗜好品、贅沢品や、それらが織りなすカビ①な生活よりも「より良く生きる」ことに価値を見出す人も多いだろう。また家庭を持ち、子どもをもうけ、子の成長を見届けながら人生を全うすることに価値を見出す人も多い（個人的には、もちろんそれは素晴らしいことだと思う）。さらに社会貢献活動や奉仕活動、政治活動や社会変革に価値を置く人もいる。つまり、価値をどこに置くかで、その人、個人の生き方が決まるといっても過言ではない。この価値については、社会と個人との相互作用の中でその意味が与えられることになる。なぜなら、生命を維持するための糧を得る上でも、貨幣を得る上でも、よく生きる上でも、大原則としてこれらは一人の力では成し遂げられないからだ。だからこそ、人は社会との間の相互作用の中に存在し、世間体の中で生きることになる。

たとえば過度なナルシスト、つまり病的に自己愛の強い人は、自分を支えるために絶えず自分に対する周囲からの称賛を必要とする。

なぜそのようなことになるのかといえば、ナルシストは日常的に自分自身に自信がないからだ。自分に自信がないので、人間関係の中で周囲を巻き込み、常に称賛を得なければ生きていくことが難しい。これに対して比較的自分に自信のある人は、

自己の中で良し悪しを決めることができるなど、ある程度、自己の内部で自己完結ができています。だから、周囲からの称賛をいたずらに求めることはしない。

これと同じことが世間体と個人の関係にもいえる。自分の中に確固とした自己像があり、自分を信頼していれば、周りのことなど本来ならどうでもよいはずだ。しかし内面が空虚である人は、自分を存立させる、その基盤を世間体に置く比重が大きく、そのことによつて絶えず世間体を気にしながら生きていくことになる。

「他人の目が気になる」とはまさにこの状態を指す。もちろん、そうでない人も多くいるが、多くの日本人はこの点において世間体に価値を置きすぎている。

そのように内面化された世間体がよく発露される場合には、治安や公衆衛生の良好さとして、また「人当たりの良さ」といった面で示されることになる。

一方で、世間体が悪しき面を示す時に、それが内に向かえば自己蔑視になり、最悪は自死を招くことにもなりかねない。また外に向かえば、世間体をもとに他者を過剰に裁く攻撃性が発揮されることになる。空虚であるがゆえに内面化され、価値を過度に置かれた世間体は、往々にして後者において発現することが多い。ここに、内面化の恐ろしさがある。

人間と動物を分かつものは何だろうか。その大きな要素の一つは、言語、つまり言葉と文字を操ることができるか否かにある。そしてそれは、個人と個人の間、そして社会と個人との間のコミュニケーションで欠くことのできないものになっているのはいうまでもない。普段、多くの人はこの言語について、あまり気にすることなく使っていることだろう。

もちろん言葉は、「山」「リング」「自動車」といったように具体的な物品を単語として置き換えて会話や文章の中でやりとりし、それを共有することができるが、より言語が人間を人間たらしめるのは、抽象的な概念を言葉にできるといふ点にある。

たとえば「愛」「希望」といったものは、具体的な物体として存在しないが、人間が人間らしく生きる上においては、とても重要なものだ。こうした抽象的な概念を時に崇高なものとして共有できるのは、科学的にリッショウ②できる範囲において、地球上に現在人類（現生人類）しかない。

もつといえ、たとえ「山」「リンゴ」といった物体について指し示す単語においても、それは実際に存在する山やリンゴとは違う。

仮に一〇〇人の人がいたとして、「山」を思い浮かべてもらおうとしよう。その想起する「山」は、一〇〇人が一〇〇人とも違うイメージを持つている。ある人は、富士山を思い浮かべるかもしれない。別の人は、北アルプスの山脈や北海道の大雪山を思い浮かべるかもしれない。そして「富士山」を何人かが思い浮かべたとしても、それぞれの「富士山」はすべて細部や色などが違っているはずである。

これが示すのは、人間は本質的に他者との間で作り出したフィクションの中に生きていくということだ。だからこそ、人は文学や芸術という魅力的なフィクションを欲するともいえる。小説や映画といった創作としての物語と現実社会はもろん違う。しかし、物事を言語として置き換え、それを共有するという意味において、それらはいずれも人々が相互に作り出したフィクションなのだ。

人と人がコミュニケーションを取る時、短い会話の中でも、固有名詞や名詞、形容詞や動詞など、さまざまな性質の言葉を組み合わせる意味のある文章としてやりとりする。それ自体が、実体のない、手に触れることのできない「概念」を常に共有していることになる。

これは「民主主義」といった政治理念や法律などの現実の社会の中にある、さまざまな概念や決まり事についてもそうだ。なぜなら「民主主義」や「刑法」などという物体は存在しないからだ。だが、重要なものであるのはいうまでもないだろう。人は、そうした概念を「存在するもの」「こういうもの」といった規定と約束事の上にコミュニケーションを取っている。

^c「人間はフィクションの中に生きていく」という文脈で語る時に、もう一つ大きな意味がある。それは、そうした「概念の棲園」ともいえるべきコミュニケーションの中に生きる時に、人は「自分は他者（あるいは集団）との関係性において、どのような位置にあるのか」を常に意識と無意識の中で感じながら過しているということだ。

つまり人は普段、「この人は、社会的に『上（の立場の人）なのか』『下（の立場の人）なのか』『同等（の立場の人）なのか』

か」「これは言ってもいい言い回しだろうか、言ってはいけない言い回しだろうか」といった、自分の社会的なポジションと役割をもとに言動を取っている（あるいは取らないでいる）。

ここに、世間体がカイザイする。

世間体も同様にフィクションである。人は、概念が複雑に積み上がって紡ぎ出される壮大かつ生き物のように蠢く文明というフィクションの中において、誰しもが役者として何かしらの役割を演じている。それは「夫・妻」「親・子ども」「上司・部下」「教師・生徒」「友人・恋人」といった比較的明確に規定し得るものに留まらない。たとえ一人でも社会の中で常に規定され、その場その場で、対面する他者との関係性や相互作用の中でダイナミックかつリアルタイムに生み出されるものだ。

そして各人が、他者や社会との関係性の中で、許容される範囲で言動を行うのが社会性のある人の在り方である。その許容される範囲を決定づけるのは、社会そのものであり、他ならぬ世間体なのだ。人間が人間である限り、この世間体というフィクションとともに生きざるを得ない。つまり、その限りにおいて人間は世間体の呪縛からは逃れられないといえる。

日本人と世間体を考える上で、少し視点を変えてみたい。その視点とは、日本人と宗教、あるいは宗教観についてだ。

日本人はよく「特定の宗教を持たない」といったことがいわれる。果たしてそうだろうか。こんな調査がある。二〇一八年にNHK放送文化研究所が参加している国際比較調査グループISSPが行った日本人の宗教意識に関する調査では、日本人が「信仰している宗教」について、仏教を信仰している人が31%、神道が3%、キリスト教が1%となったのに対して、「信仰している宗教なし」としたのは62%にのぼった。多くの日本の仏教が、たとえば毎週日曜に教会に行くことを信者の務めとするキリスト教会と違い、おしなべて葬祭やそれに関連した行事以外に日常的な宗教行為を信者として行わないことからすれば、日本人の大多数が特定の信仰を積極的に持つていないとも見ることができるといえる。

一方で多くの日本人は正月には神社仏閣へ初詣に行き、彼岸には墓参りをし、近年では「パワースポット」としてシセキや霊場などを訪れている。

これは意識の上では、「自分は特定の宗教を持っていない」「自分はどの宗教勢力の信者でもない」と感じながらも、無意識下

では、少なからず人智^{じんち}を超えるものに対する尊敬とイフの念を抱く人が多くいることを示している。これこそ、日本人の宗教観だといえる。

そもそも宗教とは、それぞれの文明圏において、その社会の規範と哲学の源泉になっていくものである。たとえばキリスト教文明圏であるEUや南北アメリカ諸国では、近代化によって国の統治機構や国家権力と教会が切り離され、政教分離を謳う憲法を冠する国が多い。さらに近年、「教会離れ」といった世俗化が進んでいるものの、多くのキリスト教文明圏に住む人々は、冠婚葬祭を教会で行う。またカトリックの総本山であるバチカンや、その最高権威である教皇は、カトリック教会だけではなく、プロテスタント各派を含んだキリスト教圏全体に大きな権威と精神的影響力を持っている。イスラム教圏の一部では、統治機構や法体系との分化が曖昧で、社会の隅々までイスラム教の教えが染み渡り、かつ生活の中で顕在化している国が多い。

諸説はあるものの、文明の萌芽と共に（あるいは、それ以前から）宗教はあった。その意味で、宗教は文明であるともいえる。そもそも言語を持っていることによって人は抽象的な概念の中に生きているのだから、人間の存在そのものが、本来的、本質的に宗教的な存在だといえなくもない。

もつといえ、人は「いかに生きるか」を常に求めざるを得ない宿命にある。このため、宗教、あるいは宗教的なものから完全に逃れることはできない。であるからこそ、宗教体系が社会の規範の源泉や基盤となつているのである。

日本人の宗教観について立ち戻つてこの点を見ると、表面上、その体系は弱まっているように見える。それにもかかわらず、日本社会は高い規律と公共性、犯罪発生率の低さなどを誇っている。これは現在の他の国や文明圏と比較して一見、（良し悪しは別として）特異な社会であるように映る。なぜここまで「社会共通の規範を共有していない」日本社会で、人々は規律的に行動できるのだろうか。私は、ここに世間体という半ば宗教的なものが作用していると確信している。

（犬飼裕一『世間体国家・日本 その構造と呪縛』による。ただし原文を一部改めた。）

問一 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部A「人は生きる上で、何かしらに価値を置かなければ生きていけない」とあるが、筆者はどのようなことに価値を置かなければならないと考えているか。七〇字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「内面化の恐ろしさがある」とあるが、それはどのようなことか。九〇字以内で説明せよ。

問四 傍線部C「人間はフィクションの中に生きている」という文脈で語る時に、もう一つ大きな意味がある」とあるが、筆者が考える二つの意味について、それぞれ五〇字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「なぜここまで『社会共通の規範を共有していない』日本社会で、人々は規律的に行動できるのであろうか」とあるが、『社会共通の規範を共有していない』日本社会とはどのような社会なのかを具体的に説明した上で、日本社会において人々が規律的に行動できる理由を本文に即して一五〇字以内で説明せよ。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

昔、伊勢(注2)ときこえし歌よみの女、世の中過ぎわびて、都にも住み浮かれな(注1)んどして、世に住むべきたづきもなく侍りけるが、太秦(注3)に籠りて、心を澄ましつつ、勤めな(注4)んどして、かく、

南無薬師(注3)あはれみ給へ世の中にありわづらふも同じやまひぞ

とよみ侍りければ、仏殿動き侍りけり。その夜の暁の夢に、貴き僧のおはしまして、「汝が歌の身にしみて思し召さるれば、世にありつくべきほどのこと侍るべし。この暁、急ぎて罷り出でね。もし道にて思はざること侍るとも、否ぶ心あるべからず」と見つ。あはれかたじけなく覚えて、やがて罷り出でぬ。何となく苦しきままに、ある古堂の人もなく侍りけるに立ち入り、仏拝み奉りなんどするほどに、輿馬(注5)に乗り連れて、ゆゆしげなる人の通り侍りけるが、何とか思ひ侍りけん、この堂に入り侍れば、伊勢すべきかたなくて、後ろのかたへ行き侍るに、この中に主と思しき僧、追ひきたりて、「かやうのこと、申すにつきはばかり侍れど、仏の御告げ侍りて申すになん。我が住むかたざまをも御覽ぜられ侍れかし」とねんごろ(注6)にきこえ侍れば、これならん、たがへんこと、仏の思し召さんも恐ろしく覚え侍りけるま(注7)まに、なびきにけり。ことに喜びて、輿に乗せて男山(注4)に具し至り侍りぬ。八幡宮(注5)の檢校(注6)にてぞ侍りける。いつきかしづくこと限りなし。子ども、あまたまうけにければ、分(注7)くかたなくわりなきものに思ひてぞ侍りける。この檢校も、年ごろあひ慣れ侍りけるものに別れて、「みめかたちのあてやかに、心ざまのわりなからん人がな」と思ひなげきけるに、この伊勢を得てければ、心のままにぞ侍りける。

(『撰集抄』による。)

(注1) 住み浮かれ……一箇所に落ち着くことができずあちこちさすらつて。

(注2) 太秦……京都市右京区中部の地名。薬師如来を本尊の一つとする広隆寺がある。

(注3) 薬師……薬師如来。現世の人々の病苦を救う仏として広く信仰されていた。

(注4) 男山……京都府八幡市やわたの北部にある山。山頂に石清水八幡宮いwashimizuがある。

(注5) 検校……寺の事務や僧尼の監督をする高位の職の一つ。近代以前、同じ境内にあった石清水八幡宮と護国寺は一体の存在であった。

問一 傍線部B「やがて罷り出でぬ」、傍線部C「ねんごろにきこえ侍れば」、傍線部D「いつきかしづくこと限りなし」をそれぞれ現代語訳せよ。

問二 傍線部A「世の中にありわづらふも同じやまひぞ」を、「あり」の意味に注意して現代語訳せよ。

問三 傍線部「もし道にて思はざること侍るとも」とあるが、「思はざること」とは結局どのようなことだったのか。本文に即して説明せよ。

問四 傍線部E「みめかたちにあてやかに、心ざまのわりなからん人がな」を現代語訳せよ。

三

次の文章は明の儒学者朱舜水の伝記である。舜水は明朝滅亡の後、日本に亡命し帰化した。これを読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合で訓点を省いた箇所がある。

舜水冒難而輾轉落魄者数十年、其来居此邦、初窮困不

能支。柳河安東省菴師事之、贈禄一半。久之、水戸義公聘

為賓師。寵待甚厚、歲歲致饒裕。然儉節自奉無所費。至人或

笑其嗇也。遂儲三千余金。臨終、尽納之水戸庫内。嘗謂

曰、「中国乏黄金。若用此于彼、一以当百矣。」新井白石謂、

「舜水縮節積余財。非苟而然矣。其意蓋在充下。举義兵以凶

恢復之用也。然時不至而終。可憫哉。」

(原念齋『先哲叢談』による。)

(注1) 輾転落魄……輾転は転々と移ること。落魄は落ちぶれること。

(注2) 柳河……筑後の柳河(川)藩。

(注3) 安東省菴……儒学者。柳河藩士。

(注4) 水戸義公……徳川光圀。水戸藩第二代藩主。

(注5) 賓師……諸侯から客として待遇される人。

(注6) 饒裕……富裕であること。

(注7) 自奉……自分で自分の生活を養う。

(注8) 詬笑……嘲笑する。

(注9) 嗇……物惜しみすること。けち。

(注10) 義兵……正義のために起こされた兵。

(注11) 恢復……失ったものを再び取り返すこと。回復に同じ。

問一 傍線部ア、イの読みをそれぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部A「初窮困不能支」を現代語訳せよ。

問三 傍線部B「尽納」之水戸庫内」をすべてひらがなで書き下し文にせよ。

問四 傍線部C「若用」此于彼、一以当百矣」を「此」「彼」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

問五 傍線部D「可憫哉」について、新井白石はなぜそのように感じたのか。朱舜水の人生に即して八〇字以内で説明せよ。